

埼玉稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪

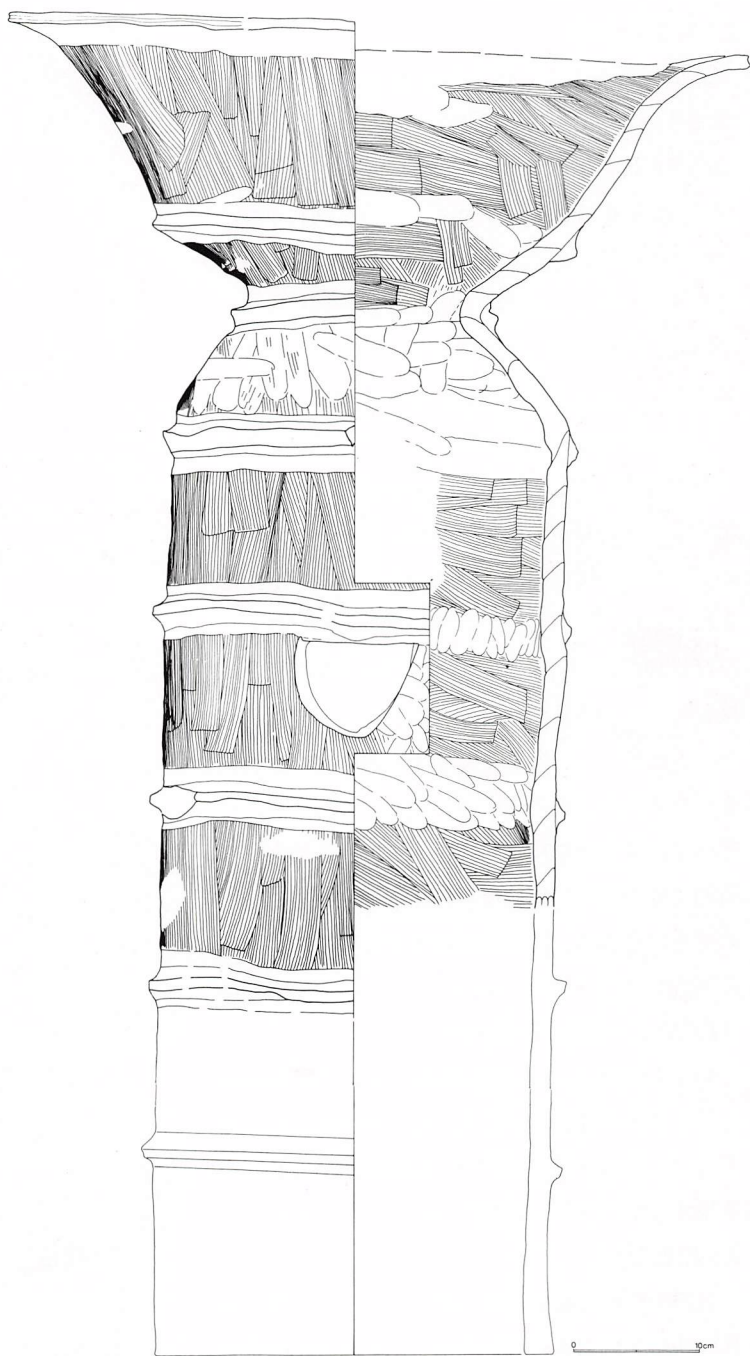
若松良一

1. はじめに

平成3年4月初旬の水ぬるむ頃、近所の住民から古墳巡回中の我々学芸員に緊急の通報があった。それは稲荷山古墳西側の内堀の水際に大型の埴輪が露出していて、放置しておくとも水没や盗難の心配があるというものだった。

さっそく、大友学芸課長と大和学芸員、若松の3名は取り上げの用具を携えて現地に急行し、現状を観察したところ、大型の朝顔形円筒埴輪がほぼ形をとどめた状態で横たわって露出していた。口縁部は内堀の水中に没しており、底部方向は土手の斜面の中に入り込んでいた。おそらく、中堤の内側の埴輪列中の1本が内堀の中に転落したものであろう。資料に新たなキズをつけぬよう細心の注意を払い、水につかりながらの作業は夕刻に開始し、完了をみたのは午後8時であった。

資料館に持ち帰り、水洗と注記をすませ、接合を



第1図 稲荷山古墳中堤発見の朝顔形円筒埴輪 (1/6)

行ったところ、ほぼ完形に復することができた。埼玉古墳群では初めての朝顔形埴輪の完形資料である。常設展示予定であるが、学術的価値も高いので、ここに資料報告をしようとするものである。

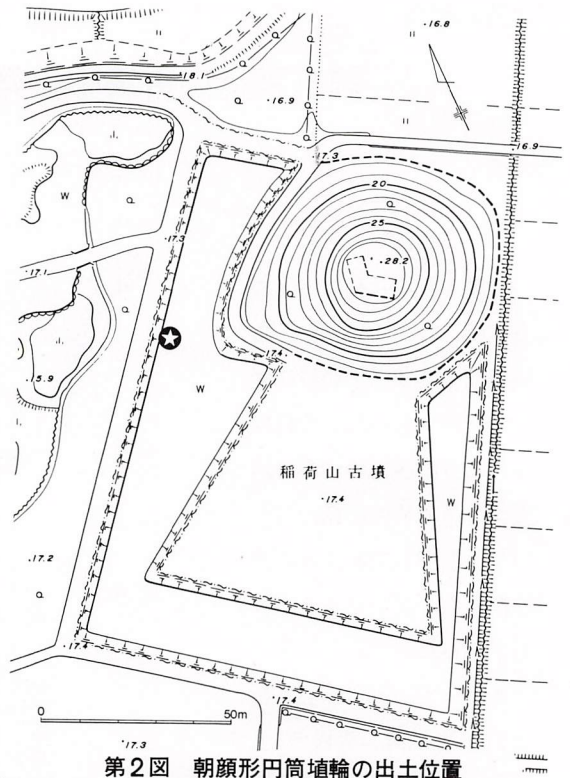
2. 資料の特徴

底部付近を欠き、残存高は80cmである。円筒部はズン胴で、平均直径31.5cmを計る。4本の凸帯が現存するが、その間隔はほぼ等しく14.5cm前後である。外面はタテハケ調整が施され2次調整は認められない。内面は最下段ではナナメハケ、上の2段ではヨコハケ調整されている。円筒部は一気に巻き上げて成形したものでなく、休止をくりかえしながら積み上げていったのであり、現状の第3凸帯の位置では器形が大きくくびれるので、乾燥単位とみてよいだろう。凸帯は断面台形状を呈し、突出度が高い。また、器壁に密着させるために強いナデが施されており、内側の対応する位置にも斜位のナデ及び指頭押圧が行われている。第3凸帯の直下に接して半円形透孔が一对穿孔されている。肩部はドーム状をなし、頸部でくの字状に強くくびれ、そこには断面三角形の凸帯が巡る。頸部から口縁部へは段をもって移行し、その接合面を補強する目的で幅の広い凸帯が巡る。口縁部は上方で外反の度合いを強め、端部はほぼ水平に開く。口縁部の外面にはタテハケ、内面にはヨコハケ調整が施されている。口径は59.5cmである。

胎土中にはチャート、長石、凝灰岩、石英の粗砂を多く含み、白色パミス、角閃石、酸化鉄粒も少量含む。やや軟質の焼上がりで浅黄橙色(10YR8/3)を呈するが、外面と口縁部内面には赤彩が残る。

3. おわりに

資料の採集に協力された沼尻一郎、今井隆の両氏、報告に協力された日高慎、沢田卓也の両君に厚く御礼申し上げます。



第2図 朝顔形円筒埴輪の出土位置

